

JR三島駅南口を降りて約5分歩くと、市街地に湧水とホテルが見られる三島。このような街が他にあるのでしょうか。多くの文人が好み、作品の題材にもなった三島。住んでいる私たちにも、訪れる皆様にも「心地よいまち」になるように、市民・企業・行政が協働で環境整備を行ないました。なぜか、ホッとするまち「三島」をごゆっくりお楽しみください。

散策ルート所要時間 5km 約2時間 解=裏面の解説文をご覧ください 富士山が眺望できるビューポイント

2008.1.31発行



三島駅南口



三島広小路駅 ↓3分



三島田町駅 ↑6分



三島商工会議所編
静岡県三島市一番町2-29
TEL055-975-4441 FAX055-972-2010
http://www.mishima-cci.or.jp info@mishima-cci.or.jp
協力：三島市

散策ポイント解説

自然環境ポイント

解①カワセミ

くちばしが長く、背中のブルーと胸・腹のだいたい色の対比が美しい。早春の頃、雄が雌に魚を渡し、求愛する姿が見られる。現在、都市化と共に餌場をなくし、川から姿を消しつつある。

解②ホタル

昔、源兵衛川の流域には多くのゲンジボタルが見られた。しかし、湧水の減少により水量の減った源兵衛川から姿を消してしまった。

平成4年、地元企業による冷却水の供給により、翌年には放流した幼虫が羽化し、ホタルが復活した。その後、餌の放流、川の管理・清掃により、5月初旬にはゲンジボタルの舞が見られる珍しい川になった。

現在、源兵衛川のゲンジボタルは日本で1、2を争う早い時期の発生が特徴である。

解③ミシマバイカモ

水の汚染に非常に敏感で、きれいな冷たい水の中でしか育たない。花の咲く時期は5～9月頃だが、場所によっては一年中咲いている。

三島自生のもはすでに絶滅し、現在あるミシマバイカモは柿田川で保護育成されたものを移植したものである。

解④金木犀（三嶋大社 国指定天然記念物）

樹齢1,200年と伝わる日本一の大木である。9月上旬と9月下旬～10月上旬にかけて2回薄黄色の小花を全枝につけ、その芳香は2里に及ぶといわれている。

解⑤白滝公園

大きな樺の木々があり、心地好い木陰を作っている。足元には溶岩が露出し、あちこちに富士山の雪解け水が湧き出し、少し離れた菰池からの湧水と合流し、桜川となっている。

かつてここは三島の一大湧水池で、湧き上がる水量が多く滝のように流れ落ちることから「白滝」と呼ばれたのが名前の由来である。

解⑥蓮沼川（宮さんの川）（源流：楽寿園の小浜池 全長1km）

楽寿園に小松宮別邸があったことから「宮さんの川」と呼ばれている。一時、湧水の枯渇で川が汚れてしまったが、地域の有志が三島市と交渉し、東レ三島工場から冷却水を流してもらうことになり、現在のようなきれいな川になった。

この地域の人々の活動は「宮さんの川を守る会」として定着し、奉仕活動で川を清掃し、花壇を設置するなどして四季折々の花を咲かせている。

解⑦源兵衛川（源流：楽寿園の小浜池 全長1.5km）

川の名称は工事に深く関わった寺尾源兵衛に由来する。豊富だった水量は都市化と共に激減し、川の汚染もひどくなった。平成2年、「源兵衛川親水公園事業」の指定を受け流域が整備された。水も冷却水を流し、現在は美しい水辺環境が取り戻されている。

また、市民により「源兵衛川を愛する会」が結成され、河川清掃やホタルの幼虫放流などの活動を通して親水公園は維持されている。

解⑧桜川（水辺の文学碑横）（源流：菰池公園・白滝公園）

三嶋大社脇を通り抜け、さらに南へと流れている。白滝公園から三嶋大社にかけての「水上通り」は歩道も美しく整備されている。

また、「水辺の文学碑」として、太宰治や若山牧水など、三島ゆかりの文学者10名の句碑も並び、文学散歩も楽しめる。

解⑨御殿川

白滝公園付近の水門で桜川から分流するが、この水門は水量が多く、激しく「ドンドン」と流れ落ちることから「ドンドン淵」と呼ばれている。

解⑩四ノ宮川

名前の由来は伊豆四ノ宮広瀬神社からと伝えられる、楽寿園小浜池から流下する自然河川である。

暗渠になっていた川を平成16年に整備し、自噴している湧水を四ノ宮川に流すことで、憩いの場へと変化させた。

解⑪菰池公園

公園内の菰池の湧水は桜川の水源となっている。名前の由来は、昔、真菰という植物が群生していたことから名付けられたといわれている。

解⑫中郷温水池（三島市眺望地点）

中郷温水池は、美しい富士山が眺められることから平成14年に三島市の眺望地点に指定しました。三島市では、この他8地点（末広山・山中城跡・施行平・向山古墳群・新町橋・新城橋ほか）を同じく眺望地点として指定しています。

歴史ポイント

解⑬三嶋曆・三島茶碗（三嶋曆師の館）

関東方面の地方曆の中で最も古く、国内でもいち早く木版による印刷曆として出版され、技術も優秀であった。河合家の伝承では宝亀年間（770年～780年）に、祖先が山城国賀茂より三嶋明神を観請して豆州三島に下り、その子孫の河合氏が代々曆を版行してきたという。

三島茶碗の呼称の由来の一つに三嶋曆がある。室町時代末期から桃山時代の茶会記には「三島」、「こゆみ（曆）」と記されている。これは侘茶を創造しようとする茶人達が朝鮮半島よりもたらされた陶器を愛用し、その象嵌模様が三嶋曆の仮名文字に似ていたことから「三嶋手」、「曆手」と名付けられたといわれている。

解⑭孝行犬の墓（圓明寺）

幕末の頃、番犬として母子6匹の犬が寺を守っていた。一匹の子犬が病気で死んだ後、母犬も病気になるようになったが、子犬たちはそばを離れなかった。町の人々から食べ物を貰っても食わずに持ち帰り、母犬に与えた。母犬が死んでも子犬たちは屍を守ったが、ついには子犬たちも死んでしまった。

寺の日空上人がそれを見て母子6匹のために石碑を建て、人にも勝るその純情を表彰して世の中の人に誠めとした。

解⑮大興寺跡（市ヶ原廃寺址）

白鳳時代、三嶋大社に関係深い文部富賀満の私寺として建立された。平安時代（836年）に国分尼寺焼失後、この寺は代用国分尼寺となった。その規模は市内法華寺附近から北方の祐泉寺・三嶋大社前の旧国道1号にまで延びた広範囲な地域で、薬師寺式伽藍配置の寺院址となる。

また、祐泉寺境内には当時の西塔の礎石が残っている。

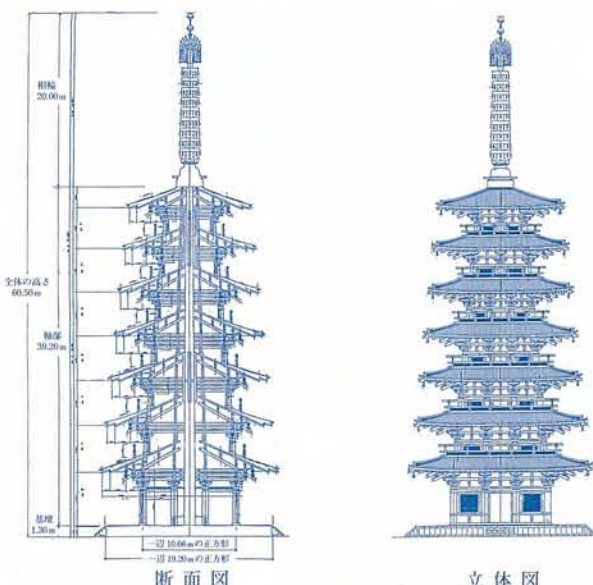
解⑯国分寺塔礎石

741年の聖武天皇の勅命により創建された2町（約214m）四方を寺域とする大伽藍の遺蹟である。現存する8個の石は七重の塔の礎石の一部で、その北半分のものである。塔の高さは60m程あったと想像される。

三島八小路

江戸時代に東海道、甲州街道、下田街道等の大路に対して、愛称をつけて呼ばれた小路。当時この八小路の名前をすらすら言えれば三島人の証明として関所を手形なしで通れたという逸話もある。

三島八小路：阿闍梨小路 桜小路 上の小路 下の小路
金谷小路 細小路 竹林寺小路 菅小路



上野国国分寺七重塔復元設計図

（第一層の柱間等が一致することから伊豆国分寺と同規格と想像される）